



さらば青函連絡船 さらば青春

さらば青函連絡船 さらば青春 平栗恒雄

明治6年の就航以来、本州と北海道を結ぶ大動脈の役割を担っていた青函連絡船が、昭和63年の春、トンネルの営業開始と同時に廃止されることになった。時代の変遷を目のあたりに見る感じだ。

青函連絡船、それは私の青春の思い出深い舞台でもあった。トンネル作りに主導的役割を果たした鹿島建設に籍を置く私は、みずから「思い出」の舞台の幕引きを手伝った思いだった。

「思い出」は昭和22年の8月中旬、私が滞在先の北海道茂辺地の友人宅から帰るときで、函館発の連絡船内でのことであつた。我先にかけ込んだ薄暗い大部屋。甲板から一、二階下りたところが目指す三等船客室であつた。

モンペ姿で可憐さだけが印象に残る彼女、確か17歳で旧制中学生だったと思う。私の占めた場所の隣に、先に来ていたのか後から来たのかは定かでない。

あれから40年の間、「青函連絡船」と聞けば、この出合いが思い出されるのであつた。

当時、私は静岡県に在る運輸省三島鉄道学校（三年制）の二年生で、21歳になっていた。旧制中学の四年生に該当するのだが、その割に年を取り過ぎていたのは、戦時中に少年飛行兵として寄り道をしてきたからである。身分が国鉄職員で、給料を貰いながらの勉学は、戦時中の苦勞を忘れさせてくれる文句の無い生活であつた。

ただし、唯一つの問題は食料難。寮では毎日空き腹を抱えての生活が続いた。もっとも困つたのが夏、冬の長期間の休みだ。生徒は食料休暇と称してそれぞれの郷里に帰ることとなる。しかし私の郷里といえば東京、全国一食料難の東京に帰っても意味が無い。そこで思いついたのが長い休みのたびに、全国に居る食料が豊かな友人宅を訪問することであつた。

たまたまその年の夏休みが、北海道の友人宅であつたのである。20日間近くの滞在で、友人の母親が「東京の人は薯だけでよく頑張るね」と言っていたのを聞き、ここが引き際と感じ、帰京の途についたのである。

その頃の私の性格はまじめで内気、緊張すると多少どもつた。容貌には全く自信が無かつた。しかも、当時の教育が「男女7歳にして席を同じうせず」の感覚ときては、女性との交際などある筈もなかつた。

これまでに妙齡の女性などと親しく話し合ったことも無いし、また、話しもできないものと思ひこんでいた。

ところがこの時は違った。彼女が活し上手（聞き上手）だったのか、彼女の待つ雰囲気（性格）がそうさせたのか、話せないはずの私が話せたのである。

七ツボタンの予科練に憧れて入隊したこと、家族は朝鮮から引き揚げてきたこと、遅まきながら現在勉学中であること、今日は北海道の友人宅から帰るところであること、青森に着いたら兄の戦友宅に寄ることなどでああった。

彼女は北海道の親戚のところに、食料品の買い出しに行った帰りとのことであつた。青森駅には母と妹か迎えにくるそうだ。ここで、彼女は大変喜ばしい提案をしてくれたのである。

私が兄の青森に居る戦友宅がわからないというと、彼女は駅で荷物を、母に渡したら案内してくれるという。嬉しかった。兄の戦友宅を探してくれるのも有難かったが、彼女と少しでも長く一緒に居られるのが嬉しかった。船室の薄暗さも不快なペンキの匂も気にならない船旅だった。

退堀しながらの往路に比べ、帰りはまたたく間に終わってしまった。物心ついて以来、女性と楽しく長話しのできた初体験であつた。

しかし、世の中そんなに甘くは無かった。迎えにきていた彼女の母親は、彼女が私を案内することに反対した。彼女は「戦災がひどくよその人では探せない。無理よ。」と行って、懸命に説得に努めてくれた。押し問答がしばらく続く。

頃合いを見て、私はきっぱりとあきらめた。

船の上の会話だけでも一生思い出に残る楽しさだった。ここで彼女から断われたのでは、後味の悪いものとなり夢もさめてしまう。ここは私から遠慮しようと決断し、母親と彼女にこれまでの親切を謝し、お別れする旨を告げた。

彼女の「ごめんなさい。頑張ってるね。」という別れの言葉と、「悪いわね」という思いをこめた目は今でも忘れることはない。

可憐で美しく才智と思いやりのある彼女のことだから、今は幸福に暮していることであろう。また、そうなってもらいたいと願っている。

青函連絡船が来春から姿を消すことになると、私の淡い初恋にも似た思い出は、より一層記憶から風化されてゆくこととなろう。

（昭和62年夏・記）